

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13365

研究課題名（和文）朝鮮時代の古文書の様式論的研究

研究課題名（英文）Joseon Dynasty Ancient Documents Format Study

研究代表者

川西 裕也（KAWANISHI, YUYA）

新潟大学・人文社会科学系・助教

研究者番号：30736773

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：朝鮮中近世の古文書研究の重要な課題である様式論的研究と伝来論的研究を遂行し、高麗（10～14世紀）・朝鮮初期（14～15世紀）における公文書の押印位置の変化、および朝鮮後期（17～19世紀）における国王関連文書の廃棄の実態を解明した。また、朝鮮古文書の事例収集の一環として、日本に所蔵されている壬辰戦争（文禄慶長の役）関連の朝鮮古文書の悉皆的な調査を進めた。特に、日本軍の捕虜とされた朝鮮王子一行の墨跡（書簡・詩文）を網羅的に収集・整理して内容分析を行い、また、1594年に発給されたと伝わる「朝鮮国礼曹司書簡」が偽作されたものであることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって明らかにされた、高麗・朝鮮初期の公文書における押印位置の変化の様相は、当該時期の古文書の真偽を判別する際、有効な指標となる。また、国王関連文書の廃棄の実態は、朝鮮後期の国王の位相を考察する上で一定の意義がある。さらに、これまでほとんど調査・分析の対象とされてこなかった壬辰戦争時の朝鮮古文書を取り上げた本研究の成果は、朝鮮古文書研究のみならず、壬辰戦争の実態解明にも大きく寄与するものと思われる。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to elucidate changes in the sealing positions of official documents during the Goryeo (10th to 14th century) and early Joseon (14th to 15th century) periods, as well as the reality of the disposal of documents related to the kings during the late Joseon period (17th to 19th century). In addition, as part of the investigation and introduction of ancient Korean documents, I progressed with the examination of Korean documents related to the Imjin War that are held in Japan. Particularly, I comprehensively collected and organized the writings (letters, poems) of the Korean prince and his entourage who were captured by the Japanese army, conducted content analysis, and pointed out that the "Chosunguk Yejosa Seogan" believed to have been issued in 1594 was a forgery.

研究分野：朝鮮史

キーワード：古文書 壬辰戦争 高麗 朝鮮王朝 アーカイブズ 東洋史 歴史学

1. 研究開始当初の背景

近年、朝鮮中近世(10~19世紀、高麗・朝鮮時代に相当)の古文書に関する研究は非常に活発であり、研究の蓄積も相当量に達している。しかし、従来の古文書研究では文書に記された内容を分析するに止まり、体系・様式・伝来・機能など、古文書のもつ基本的性格に対する考察が十分に深められてこなかった。「古文書を利用した」研究は盛んであるが、「古文書そのもの」に関する研究が圧倒的に不足しているのである。

「古文書そのもの」に関する研究が進まない限り、当該文書の内容を正確に読み取ることにはできない。また、真偽判定や発給年代の確定も困難である。こうした研究の不振のため、現在、所蔵機関ごとに古文書の整理・分類の方法が大幅に異なるなど、混乱と障害も生じている。

上記の研究現況を踏まえ、朝鮮中近世の古文書研究の重要な課題として、「様式論的研究」と「伝来論的研究」を挙げることができる。様式論的研究とは、古文書の様式とその変遷過程を分析するものであり、伝来論的研究とは、古文書がいかなる経緯を経て今日まで伝わってきたか(あるいは伝わらなかったか)を明らかにするものである。いずれの研究も、「古文書そのもの」を理解する上で重要な意味があるが、これまで充分に取り組みされてきたとは言いがたい。

2. 研究の目的

申請当初には、朝鮮古文書の「様式論的研究」を対象を絞り、古文書における捺印方式、年号表記、花押・署名のメカニズムの解明を試みようとした。しかし、2020年度以降、世界的に拡大した新型コロナウイルス感染症により、韓国をはじめとする国外の研究機関での調査がすべて不可能となったため、研究計画の変更を余儀なくされた。そこで、様式論的研究のみならず、伝来論的研究にも対象を拡大し、朝鮮中近世の古文書研究を進めることとした。これに加えて、日本国内に所蔵されている、16世紀以前の朝鮮古文書の調査を実施した。17世紀前半までに朝鮮で生じた戦乱とその影響によって古文書が多数失われてしまったため、16世紀以前の朝鮮古文書の事例数は極めて少ない(現在確認されている事例数は約5千点程度)したが、当該時期の朝鮮古文書を調査して学界に広く紹介することは、古文書研究の進展にとって非常に重要な意味をもつのである。

3. 研究の方法

本研究では下記の3つの課題を設定する。

課題：様式論的研究の一環として、捺印の方式、すなわち古文書における押印位置の分析を進める。特に、高麗時代(10~14世紀)から朝鮮初期(14~15世紀)までの公文書において、押印の位置がいかに変化していったかについて分析を加える。

課題：伝来論的研究の一環として、文書の廃棄と再利用の様相に焦点をあてる。具体的には、朝鮮後期(17~19世紀)における国王関連文書がいかに廃棄されていたかを検討する。

課題：16世紀以前に発給された朝鮮古文書の調査・分析を進める。特に、日本国内に所蔵されている壬辰戦争(文禄・慶長の役/壬辰・丁酉倭乱/万曆朝鮮役)にかかわる朝鮮古文書を悉皆的に調査する。

4. 研究成果

課題：高麗時代から朝鮮初期の公文書に対する分析の結果、発給年月日上における押印の位置が、時期が下るにつれて次第に上昇していく傾向を見出すことができた。とりわけ、高麗時代から朝鮮太祖代(1392~1398年)にかけての公文書では、発給年月日の中、年号に対する押印事例がほとんど確認されないという事実が明らかとなった。この押印位置に関する新知見は文書の真偽判別にも重要な意味をもつ。なお、高麗・朝鮮時代の公文書における押印位置については、同時代の中国諸王朝(宋・元・明)の影響を受けた可能性が想定されるが、関連資料の不足から明確な解答を下すことは難しい。

本研究を進める過程において、太師廟(韓国・安東市)に所蔵されている、高麗時代の「鄭光道教書」(14世紀発給)の印が、同時代の国王文書としてあり得ない位置に押されているということが確認された。これを手がかりとして、戦前に撮影された「鄭光道教書」のガラス乾板写真を検討したところ、そこに写されている文書が、現存する文書とは異なる、もう一つの「鄭光道教書」であることがわかった。また、ガラス乾板写真の「鄭光道教書」に押された印を検討したところ、13世紀、元が高麗に下賜したパクパ字「𠂔(馬+付)高麗国王印」であることが判明し

た。なお、現存する「鄭光道教書」は戦後に韓国で作られた写しと推定される。

本課題の成果は、「高麗恭愍王代発給の鄭光道教書の再検討 パクバ字ニ（馬+付）高麗国王印の押印事例」（原題韓国語、『史林』70、2019年）、「朝鮮王朝の国王文書」（小島道裕・田中大喜・荒木和憲編『古文書の様式と国際比較』勉誠出版、2020年）、「高麗 朝鮮初期の公文書における押印の位置について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』224、2021年）として公刊した。

課題：朝鮮後期（17～19世紀）において、御諱・御押・御筆資料（国王の諱や花押が記された資料や、国王の親筆によって書かれた資料）がいかに廃棄されていたのか、その実態を分析した。その結果、朝鮮後期には、古文書を含む御諱・御押・御筆資料を廃棄する際、そのまま燃やしたり、壁紙・紙製品などに再利用したりすることはなく、「洗草」という特殊な作業を経ていることが明らかとなった。洗草とは、御諱・御押・御筆資料を破り刻んで水に沈め、細かく粉砕する行為と推定される。御諱・御押・御筆は「国王そのもの」の象徴であったため、廃棄する際、洗草によってその墨跡を消し去ることを必要としたのである。なお、洗草の慣行がいつ始まったのかという点については、関連資料を見出すことができず、今後の課題とせざるを得なかった。

本課題の成果は、「朝鮮後期における御諱・御押・御筆資料の廃棄 洗草の再検討」（『朝鮮学報』256、2020年）として公刊した。

課題：壬辰戦争時、加藤清正の捕虜となった朝鮮王子（臨海君・順和君）とその従臣らが、日本の武将や僧侶に与えた墨跡（書簡・詩文）14点を悉皆的に調査した。その内訳は、書簡7点（同文の写しを含む）詩文7点である。調査結果をもとに、墨跡の内容と作成背景について考察することで、これまでその実態がほとんど不明であった、捕虜期間中における朝鮮王子一行の動向を明らかにすることができた。

また、1595年、朝鮮の「礼曹司」が加藤清正に発給したとされる「朝鮮国礼曹司書簡」（録文）を取りあげて分析を進めた。本文書は、朝鮮人が清正の武勇・仁徳を称賛したものとして、江戸時代より広く知られてきた。しかし、「礼曹司」という名称からもわかるように、本文書は明白な偽文書である（朝鮮の外交担当官庁は「礼曹」）。本文書が、いつ誰によって、どのような目的で作成されたのかについては明確でないが、①壬辰戦争中における日本人・朝鮮人の合作、②壬辰戦争後における日本人・朝鮮人の合作、③江戸時代における日本人（特に対馬人）の作成、という三通りの仮説を提起することができる。

本課題の成果は、「朝鮮王子一行とその墨跡」（川西裕也・中尾道子・木村拓編『壬辰戦争と東アジア 秀吉の対外侵攻の衝撃』東京大学出版会、2023年）、「朝鮮国礼曹司書簡」と加藤清正」（『九州史学』195、2024年）として公刊した。

その他：朝鮮中近世の古文書研究を進める上での副産物として、下記の成果を得た。

まず、(A)日本の学界で広く普及している「文禄慶長の役」という呼称についての再検討である。これまでの研究では、「文禄慶長の役」呼称は、1910年の韓国併合後、朝鮮人への不必要な刺激を避けるという「配慮」のもと、「朝鮮征伐」・「征韓」呼称に代わって広く使用されるようになったと認識されてきた。しかし、戦前日本における関連論著を網羅的に調査した結果、「文禄慶長の役」・「文禄の役」という呼称は1910年以前より使用されており、韓国併合とは特に関係がないことが明らかとなった。朝鮮の地名のみを冠した「朝鮮征伐」や「征韓」などという呼称では大陸征服を目指した豊臣秀吉の「雄大な志」を表現することができないため、戦争勃発の年号から採った「文禄慶長の役」や「文禄の役」という呼称が意識的に用いられるようになったと推定される。

(B)北島万次編『豊臣秀吉朝鮮侵略関係史料集成』1～3（平凡社、2017年）の書評を行い、その研究史上の位置づけについて考察した。本書は、壬辰戦争にかかわる日・中・朝の関連記事を時系列順に載録した大部の史料集であり、その刊行は壬辰戦争の研究に極めて重要な意義をもつが、史料的価値の低い朝鮮史料が複数引用されているなどの問題点が指摘される。

(C)鄭琢『龍蛇雜録』に載録されている文書について訳註を行った。本文書は、1593年、加藤清正が駐屯していた西生浦倭城を訪れ、清正と会談を行った朝鮮人・蔣希春の口述報告書である。当時の西生浦倭城の状況や清正の動向を窺うことのできる貴重な史料といえる。

以上の研究成果は、「文禄慶長の役」呼称の再検討」（『韓国朝鮮文化研究』21、2022年）、「Five Historiographical Trends in the Postwar Japanese Study of Joseon History」（趙一水氏らと共著、『Seoul Journal of Korean Studies』36、2023年）、「訳註 壬辰戦争における加藤清正の会談記録（一）」（『環日本海研究年報』29、2024年）として公刊した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 5件）

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 川西裕也 | 4. 巻 21 |
| 2. 論文標題 「文祿慶長の役」呼称の再検討 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 韓国朝鮮文化研究 | 6. 最初と最後の頁 63 - 89 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002003987 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 川西裕也 | 4. 巻 224 |
| 2. 論文標題 高麗 朝鮮初期の公文書における押印の位置について | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告 | 6. 最初と最後の頁 161 - 180 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 川西裕也 | 4. 巻 256 |
| 2. 論文標題 朝鮮後期における御諱・御押・御筆資料の廃棄 洗草の再検討 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 朝鮮学報 | 6. 最初と最後の頁 95 - 128 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 川西裕也 | 4. 巻 70 |
| 2. 論文標題 高麗恭愍王代発給の鄭光道教書の再検討 バクバ字ニ（馬+付）馬高麗国王印の押印事例 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 史林（首善史学会） | 6. 最初と最後の頁 99 - 124 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20457/SHA.70.4 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|----------------------|
| 1. 著者名 川西裕也 | 4. 巻 29 |
| 2. 論文標題 訳註 壬辰戦争における加藤清正の会談記録(一) | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 環日本海研究年報 | 6. 最初と最後の頁 1 - 13 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 Ilsoo Cho, Yuya Kawanishi, Kanako Kimura, Taku Kimura, Yamato Tsuji, Takeshi Yagi | 4. 巻 36 |
| 2. 論文標題 Five Historiographical Trends in the Postwar Japanese Study of Joseon History | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 Seoul Journal of Korean Studies | 6. 最初と最後の頁 655 - 680 |
| 掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.1353/seo.2023.a916937 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

[学会発表] 計8件(うち招待講演 3件/うち国際学会 2件)

| |
|----------------------------|
| 1. 発表者名 川西裕也 |
| 2. 発表標題 「朝鮮国礼曹司書簡」と加藤清正 |
| 3. 学会等名 第17回 壬辰戦争研究会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 川西裕也 |
| 2. 発表標題 朝鮮王子書状にみる壬辰戦争 |
| 3. 学会等名 2022年度 九州史学研究会大会シンポジウム「壬辰戦争の史料論」(招待講演) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 川西裕也 |
| 2. 発表標題 書評：北島万次編『豊臣秀吉朝鮮侵略関係史料集成』（平凡社、2017年） |
| 3. 学会等名 第15回 壬辰戦争研究会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 川西裕也 |
| 2. 発表標題 高麗末朝鮮初の公文書と国家 |
| 3. 学会等名 第5回 韓国歴史研究会 著作批評会（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 川西裕也 |
| 2. 発表標題 「朝鮮王子一行誓書」の虚と実 壬辰戦争期、日本の武將に送られた一文書を読む |
| 3. 学会等名 令和3年度 九州史学会大会 朝鮮学部会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---------------------------|
| 1. 発表者名 川西裕也 |
| 2. 発表標題 「文禄慶長の役」呼称の再検討 |
| 3. 学会等名 第9回 壬辰戦争研究会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 川西裕也 |
| 2. 発表標題 高麗恭愍王代発給の鄭光道教書の再検討 |
| 3. 学会等名 成均館大学校史学科BK21+ 事業団 国際学会議「韓国史上の権力統合と葛藤」(招待講演)(国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---------------------------|
| 1. 発表者名 川西裕也 |
| 2. 発表標題 日本所在の朝鮮王子一行の墨跡 |
| 3. 学会等名 第1回 壬辰戦争研究会 |
| 4. 発表年 2020年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 川西裕也, 鳥津亮二, 久野哲矢, 木村拓, 鄭潔西, 金泰, 林慶俊, 中井勇人, 鈴木開, 金子拓, 中尾道子, 太田秀春 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 東京大学出版会 | 5. 総ページ数 498 |
| 3. 書名 壬辰戦争と東アジア 秀吉の對外侵攻の衝撃 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 小島道裕, 小倉慈司, 仁藤敦史, 佐藤雄基, 田中大喜, 横内裕人, 金子拓, 川西裕也, 朴竣鎬, 文叔子, 三上喜孝, 黄正建, 阿風, 丸山裕美子, 荒木和憲, 藤田励夫, 四日市康博, 高橋一樹 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 勉誠出版 | 5. 総ページ数 432 |
| 3. 書名 古文書の様式と国際比較 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | | | |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|